なまはげの里フィロソフィ

～すばらしい人生をおくるために～

令和４年１２月

目次

序　章　なまはげの道徳 「なまはげの里フィロソフィ」　1
第一章　すばらしい人生を送るために
　1 感謝の心をこめた、元気なあいさつが幸福を呼ぶ　2
　2 自ら燃える集団をめざす　2
　3 笑顔が幸福をまねく　2
　4 精進、仕事にうちこむ　3
　5 公明正大に　3
　6 人間として何が正しいか　3
　7 過ぎた日を悔やまず、明日を怖れず、今日を生きる　4
　8 運動する習慣を身につけよう　4
　9 謙虚にしておごらず　4
第二章　チャレンジを続ける男鹿であるために
　1 進化し成長する　5
　2 市民を幸福にする　5
　3 一人ひとりが経営者　5
　4 市民の幸福が我々の使命　6
　5 オール男鹿　6
　6 目標を明確にし、同じ方向に進む　6
　7 自らのコスト意識を高める　7
　8 市民の声に耳を傾ける　7
　9 新しい道にチャレンジ　7
　10 新たな課題に立ち向かい市民参加を図る　8
　11 自分の仕事でないと言わない　8
　12 摩擦を恐れるな　8
　13 最初の目標に立ち返る　9
　14 明るい職場づくり　9
　15 向かい風ぐらいがちょうどいい　9
　16 自分の才能を社会のために使う　10
　17 魅力いっぱいな男鹿、全員が営業マン　10

序章　なまはげの道徳

「なまはげの里フィロソフィ」

　人は、自分以外の誰かのために行動する時に、最高の力を発揮します。この「利他の精神」で、市民のために、スピーディに良いサービスを提供したいものです。

　また、人間として守るべきことがあります。明るさ・礼儀正しさ・謙虚さ・公平さ・正義感・優しさ・思いやりなど、私たちが子供の頃から、「なまはげの里」男鹿で、言われ、育まれてきたことを行なえばいいのです。

　なまはげは、何時でもお山から、私たちを見守ってくれています。そして、私たちは体に染みついた「なまはげの道徳」を守って行きます。

　「一度しかない人生」、充実した幸せなものにするために、このフィロソフィをともに学び、ともに成長して行きましょう。

第一章　すばらしい人生を送るために

１　感謝の心をこめた、元気なあいさつが幸福を呼ぶ

あいさつをすることは自らの心を開き、相手を認めることです。あいさつすることで、自然に人間関係がよくなります。笑顔で先手のあいさつを心がけましょう。

元気なあいさつは、より良い人間関係を築く第一歩です。職場環境、職員の資質をより一層高めるためにも、感謝の心をこめた元気なあいさつが、幸福を呼びます。

２　自ら燃える集団をめざす

仕事をする場合、漫然と仕事をこなすより、自ら考え行動し常に一生懸命に取り組むことにより、充実感を得ることができます。充実感を得ることは、人生を豊かにします。

また、仕事だけでなく家族や、地域行事に対しても同じく接することで、充実感は大きくなり、人生の喜びも増してきます。

この繰り返しにより、仕事も仕事以外のことも常に充実し、好循環が生まれます。与えられた仕事をただこなすだけではなく、常に自ら考え行動する職員が増えることにより、組織が活性化し、職員だけでなく男鹿市も豊かになります。

３　笑顔が幸福をまねく

仕事は決して楽しいことばかりではなく、辛いことや苦しいことも多々あります。しかし、辛い時や苦しい時こそ、笑顔で仕事に取り組むことにより、自分だけでなく、周りにも元気と勇気を与え、幸福をもたらします。

また、笑顔でいると良いことが自然に舞い込んでくるものです。笑顔には、無限の価値があります。職員一人ひとりが笑顔でポジティブに仕事に取り組むことで男鹿市を元気にしていきましょう。

４　精進、仕事にうちこむ

私たちは、日々の仕事をはじめ、地域活動、ボランティア活動等で社会に参画しています。そうした中、いい仕事、有意義な活動を続けるためには、食事や休養はもちろん、余暇を使ったリフレッシュ等も不可欠なものであり、そう考えると私たちの日々の暮らし全体が社会活動につながると考えられます。こうした意識で生活することが、社会への貢献はもちろん、私たち自身の人生も豊かなものとしてくれます。24 時間公務員の心意気です。

５　公明正大に

仕事をしていく上では、公私のけじめをはっきりつけなければなりません。プライベートなことを仕事に持ち込んだり、仕事上の立場を利用したりすることは厳につつしまなければなりません。ささいな公私混同がモラルの低下を引き起こし、ついには職場全体に悪影響を及ぼすことになってしまうからです。

職員は、公私のけじめをきちんとつけ、日常のちょっとした心の緩みに対しても、自らを厳しく律していかなければなりません。そうすることで、振る舞いが堂々となったり、気持ちが前向きになったり、やる気が増して、仕事でもプライベートでも良い効果が期待できます。

「動機善なりや、私心なかりしか」を常に自らに問う姿勢です。

６　人間として何が正しいか

フィロソフィの原点にあるのが、常に「人間として何が正しいかを考え、正しいことを正しいままに貫いていく」という姿勢です。人間として何が正しいかという判断基準は、人間が本来持つ良心に基づいた、最も基本的な倫理観や道徳観です。「欲張るな」「騙してはいけない」「嘘を言うな」「正直であれ」など、誰もが子供のころに両親や先生から教えられた、よく知る人間として当然守るべき、単純でプリミティブ（初歩的）な教えです。日常の判断や行動においては、こうした教えに基づき、自分にとって都合がよいかどうかではなく「人間にとって普遍的に正しいことは何か」ということから判断していかなければなりません。

私たちが子どものころ、あぐらをかいた親に抱かれながら聞かされた“なまはげの教え”です。

７　過ぎた日を悔やまず、明日を怖れず、今日を生きる

「光陰矢の如し」。歳を取るほど時間が過ぎるのが早いというのは、大人であれば誰しも一度は感じたことがあるでしょう。

主観的に記憶される年月の長さは年少者には長く、年長者には短く感じられると言われています。また、日々の生活に新鮮味が少なくなることやマンネリ化によって、時間の経過を早く感じるようになるのかもしれません。

こうした中で、私たちは一体、普段どれほど目の前の出来事に意識を向け、対応しているでしょうか。

「時の刻みは命の刻み」といわれます。目の前のことに力を尽くし、二度と訪れない、かけがえのない今日この一瞬一瞬を大切にし、充実させていきましょう。

「過去が咲いている今、未来の蕾で一杯な今」

８　運動する習慣を身につけよう

夏の風物詩の一つに、早朝、スタンプカードを片手にした子ども達が、公園や広場で行う「ラジオ体操」があります。

ラジオ体操の健康効果は高く、基礎代謝や骨密度のアップ、血管年齢の若返り、体の歪みの改善、内臓の活性化などが挙げられます。また、身体面だけでなく、全身運動による心理機能面にもたらす効果も高く評価されています。

胸を張り、背筋を伸ばして、大きく腕を振るなど、健康は自らの体と心で作り上げられると心得て、体を動かしましょう。

９　謙虚にしておごらず

他者と意見が一致せず、対立してしまった経験は誰しもあるのではないでしょうか。

それぞれに置かれた立場や状況が違う場合、主張は異なるものです。だからこそ、相手の言葉に耳を傾ける姿勢は大切です。こちらが耳を傾けるからこそ、相手もこちらの意見に耳を傾けてくれるのです。

謙虚で素直な心は進歩の父です。改めるべきことは、すぐに改め、耳に痛いことも真直ぐな心で聞くことが大切です。「ただ謙のみが福を受く」との言葉もあります。謙虚な姿勢を心がけましょう。

第二章　チャレンジを続ける男鹿であるために

１　進化し成長する

長年同じような仕事をしていると、与えられた仕事を何気なくこなし、無難に済ませてしまうことがあります。前例踏襲で仕事をすれば特に考えることもなく、楽に仕事を終わらせることができます。

しかし、それでは職員として成長しませんし、みんながそのような考えだと組織も衰退し、機能しなくなります。同じ仕事をするにしても、「今まではこうだったけど、本当にそれでいいのか」「もっと違う方法があるのではないか」など、常に物事に対して疑問を持つことが大切です。職員一人ひとりがそのような意識を持つことにより、楽しく仕事ができ、新たな考えが生まれ、その結果業務の改善につながり、組織の活性化が図られ生産性が向上します。

「人を育み、ひとを創る組織」でありたい。

２　市民を幸福にする

商売の原点は、人を喜ばせることです。困っている人を幸せにすれば、その対価としてお金が貰え、商売が成立します。私たち、男鹿市役所職員の役割は、多くの市民を富ませることです。そして、市民が幸せになることにより、地域が活性化されます。

こうしたことが「このまちに住んでみたい、このまちで一生を終えたい」と思えるまちづくりに発展し、親祖先・大自然が創ってくれた、このかけがいのない男鹿を子々孫々に遺していくことに繋がります。

３　一人ひとりが経営者

市勢発展に求められることを確実に実施し、しかもそれだけに止まらず、職員自ら何が足りないのか、課題は何か、一人ひとりが考えて行動する。まさに自らを律する“自律”した職員となることが求められています。指示があったからやる、ないからやらないではなく、市民の幸福を念頭に自分の持つ無限の可能性を信じ、こだわりを追求する姿勢が成果となって現れます。

そして、経営者のように、常に全体を考えます。それは、男鹿市役所職員の矜持です。

４　市民の幸福が我々の使命

仕事に大きい小さいはなく、成果の違いは与えられたミッションを確実に遂行するという意欲の大小で、その違いが市民の幸せの大小へと繋がっていきます。

壁のない、フラットな組織で、常に他の部署が、何をしているかを気にかけ、必要としているなら助けてもらい、必要とされているなら助けながら、市民の幸せのために尽くす。ぎすぎすした上下関係のない、お互いに信頼し合える組織。そして、家族のように助け合いながら、昔から“なまはげの里”でおこなわれてきたように、皆が納得できるように情報を共有します。

５　オール男鹿

仕事は、目標達成のために個々がバラバラに働くより、チームとして働くことで、一人ひとりの能力が活かされ、弱みを補い合うことにより生産性を向上させます。そして同じ方向に進むことにより高い目標を目指せるようになります。人にはそれぞれの考え方がありますが、それがひとつにならないと、大きな力は発揮できません。

スクラムは、強い絆で、皆の心を一つにして組みます。そして、一人のために全員が、全員のために一人が働きます。全員に、電気が走るような組織を目指します。

６　目標を明確にし、同じ方向に進む

職員一人ひとりが実力を持ち合わせていても、それぞれ違う方向に進んでいては、力が十分に発揮されず、目標への推進力が弱くなってしまいます。

目標を明確にすることで、職員全員が同じ方向を向き、それぞれの実力を発揮することによって、力が集結され、驚くような成果につながっていきます。

さらには、職員がネガティブ思考からポジティブ思考へと変わっていくため、指示待ちではなく、自らの意思で行動するようになります。これにより、職場環境の改善につながり、課題解決のスピードも加速していくことになります。

７　自らのコスト意識を高める

製品を作り販売し利益を計上しない行政では、その生産性や業務効率、コストパフォーマンスを意識することが難しい面があります。しかしながら、職員が動くことに人件費や電気代、燃料代などさまざまな経費が掛かることを忘れてはいけません。

自分の給料を勤務時間で割り返して算出される１時間あたりの給料に見合うだけの業務量を本当にこなしているのか、常に自問自答しながら業務にあたるべきです。市役所職員にも、「はてしなきコストダウンと、品質の向上」が重要です。

８　市民の声に耳を傾ける

問題が発生したときや仕事に行き詰った時にはその対象となるものや事業を真剣に謙虚に観察し続けることが必要です。行政における問題は市民生活に直結するものであることから、ありとあらゆる手を尽くし解決しなければいけません。

現場主義に徹して、現場におもむき、市民の声にじっくり耳を傾けていくことで、解決のヒントを得ることができます。

９　新しい道にチャレンジ

成功の反対は失敗ではなく、チャレンジしないことだと考えます。また、ゼロから一が、一から千よりもずっと難しい。

時勢が目まぐるしく変化する現在、これまでのやり方や考え方に捕らわれてしまっては、市民が本当に必要とするサービスを提供することはできません。時代は常に進化しています。固定観念を捨て、自由で前向きな発想で、市民のために何が最良であるかを判断し、積極果敢に業務に励みましょう。

男鹿は三方が海に開かれています。昔、海の男たちは、気象予報もナビもない時代に自分の五感だけを頼りに、全身全霊を込めて海に漕ぎだしました。

私たちは、先人のこのチャレンジ精神、大いなるロマンを忘れてはいけません。

１０　新たな課題に立ち向かい市民参加を図る

市の施策事業の実施に当たっては、市民負担が伴うことも多いことから、市民に丁寧でわかりやすい説明が不可欠です。また、市民が行政に関心を持ち、市民参加の理解を得る必要もあります。このためには行政のプロフェッショナルとして緻密な論理構成力と粘り強い行動力を持ち、新たな課題に立ち向かう姿勢を忘れてはなりません。

１１　自分の仕事でないと言わない

組織では、様々な仕事をみんなで分担しながら進めています。一人ひとりが自分の仕事に責任を持ってやり遂げていくことが組織全体の成功に繋がりますが、仕事を進める中で、当初想定していなかった誰にも属さない仕事が生じてきます。自分の仕事でないと言うのは簡単ですが、結局は誰かが担わなければ、仕事を成功に導くことはできません。

そのような場合、求められることは仕事を率先して担う、正に「利他行」です。誰もやりたがらない、功績の少ない仕事をすることが、自分の成長につながります。そういう「陰徳を積む」ことが大事であり、組織全体にも良い影響を与えます。

１２　摩擦を恐れるな

職場の同僚や市民に対して、礼儀を尽くすことが、より良い人間関係を築くことに繋がります。特に職場では「馴れ合いではない優しさ、責め心のない厳しさ」で接することが良き関係性を築くことになるのです。

相手に合わせることも大切ですが、伝えるべきことがあれば、〈こうしてほしい〉という思いを込めて、率直に自分の意見を述べることが必要です。

摩擦を恐れてはいけません。組織をかきまわし、組織を活性化させる「ナマズになれ！」

第二章　チャレンジを続ける男鹿であるために

１３　最初の目標に立ち返る

年度初めに目標を掲げた時にみなぎっていた活力は、今、どのくらい持続できているでしょうか。決意した初志は、ゴールするまで持ち続けることが大切です。

目標を達成するには、仕事に励む職場環境の見直しも重要です。デスクに書類や物が散乱していては、集中することは困難でしょう。職場のデスク周りが整理整頓されているか、日々確認し、心と環境を整え、年度当初の目標に今一度立ち返り、日々の業務をエネルギッシュに邁進していきましょう。

整理・整頓・清潔・清掃で日々改善。そして、高い目標に進む！

１４　明るい職場づくり

職場でのコミュニケーションを円滑にすることは、仕事をする上での大切な要件であり、そのためには、お互いに信頼関係を築く必要があります。

上司、部下、同僚との間で信頼感を高めるためには、普段何気なく行っている挨拶と返事が重要です。

相手に自らの思いを投げかける挨拶と、相手からの働きかけに応じる返事をしっかりと行うことで、職場における人との関係性が良くなっていきます。

実践する上でのポイントは、挨拶であれば躊躇なく誰にでも自ら進んで行い、そして、名前を呼ばれたら即座に返事をすることです。こうした意義を心にとめ、意識して行うことで自分の成長にもつながります。

爽やかな挨拶と「ハイ」の元気な返事が飛び交う、明るい職場を目指しましょう。

１５　向かい風ぐらいがちょうどいい

仕事では、時折逆風が吹くこともありますが、今の自分の能力で、「できる」「できない」を判断していては、新しいことは何もできません。たとえ今は出来ないと思われるような困難な目標（向かい風）であっても、未来のある時点で達成すると決め、その実現のため、自分の能力を高める努力を日々続けていく。つまり、「能力を未来進行形でとらえる」ことが大切です。

自分の能力は未来にはもっと高いものになっていると信じ、困難に立ち向かいましょう。

第二章　チャレンジを続ける男鹿であるために

１６　自分の才能を社会のために使う

才能や能力は、社会を成り立たせるために天から与えられたものです。どんなすぐれた能力も、それが生み出した成果も、自分だけのものではありません。才能や手柄を誇り、傲慢に振る舞うことなく、自らの持てる才能を「世のため人のために」使う人間でありたいものです。

この素晴らしい資源のある男鹿に生まれて来たことに感謝し、親祖先が遺してくれた男鹿に恩返ししていきましょう。子孫に誇れる仕事を遺していきましょう。

１７　魅力いっぱいな男鹿、全員が営業マン

効果的な情報発信をするためには、男鹿の魅力を私たち自身が理解し、公的ツールでの情報発信とともに、個人レベルでの発信が鍵を握ります。

「近きもの悦べば、遠きもの来たる」です。男鹿に住むことに誇りを持ち、そのことを多くの人達に伝えていかなければなりません。

そして、効果の最大化を図るためには、地域資源の掘り起こしと創意工夫を凝らした磨き上げが不可欠です。

ユネスコ無形文化遺産の「男鹿のナマハゲ」や、名水滝の頭、天然の良港「船川港」、そして半島という特性など、他地域が羨む男鹿ならではの資源を活用し、唯一無二の地域づくりに汗を流しましょう。

※ この「なまはげの里フィロソフィ」には、『動機善なりや私心なかりしか』など、稲盛和夫氏の言葉や表現を使わさせて頂きました。

令和４年１２月策定